

マケドニア考古学の成立と展開

松尾 登史子

The Establishment of Greek Macedonian Archaeology and its Development

Toshiko MATSUO

マケドニア考古学はギリシア南部の考古学より遅れて開始された。これについて、ギリシア南部の豊かな古典古代の栄光の陰に隠れていたこと、特にマケドニアにおける古文書の稀少がその一因であり、他方では、マケドニアのオスマン・トルコ支配時代が長く、欧州列強による発掘調査が南部ほど行われなかったことが原因として挙げられる。そして、その後の研究調査の展開も、マケドニア問題など、単に古代のみならず中世および近現代をも視野に入れて理解すべき複雑な民族的及び政治的な要素が絡んだものであった。このようなマケドニア考古学の研究史は大きく3期に分けられる。第3期（1950年以降）に大きな進展をみており、現在も各地で発掘調査が進行している。

キーワード：マケドニア、先史考古学、古典考古学、ビザンティン考古学、マケドニア問題、

The practice of archaeology in Greek Macedonia started its history later than that of southern Greece. There are two reasons for this development: first, ancient relics coming out of Macedonia hid themselves behind the glory of the 'classics', of the South. Furthermore, only a few ancient sources survive in Macedonia. Secondly, the long Ottoman period prohibited Westerners from researching its lands. After becoming part of the Greek state, the development of the archaeology of Macedonia had also been fraught with many kinds of ethnic and political difficulties, for example, the Macedonian Question. Therefore, this theme should be studied from the viewpoint of all periods, not only ancient times but also medieval and modern times. Three main phases can be identified in the history of the archaeology of Macedonia over the last two centuries. We can see a large development during the last phase (since 1950). Today, many excavations are currently underway at many sites throughout Macedonia.

Key-words: Macedonia, Prehistoric Archaeology, Classical Archaeology, Byzantine Archaeology, the Macedonian Question.

はじめに

「マケドニア (Makedonia)」という語は現代ギリシア語辞典¹⁾において、以下の4項目で定義される²⁾。つまり、 α . ギリシア共和国北部を占める地域、 β . バルカン半島の中央を占める広い地域（現在のギリシア共和国北部地方（トラキアまでを含む）およびブルガリア共和国の南西部地方、マケドニア旧ユーゴスラビア共和国が占める地方、アルバニア共和国の東部地方が含まれる。）、 γ . 古代のマケドニア王国³⁾、 δ . 現在のマケドニア・旧ユーゴスラビア共和国、とある。

上記の4項目の成り立ちについては近現代史の複雑な事情が絡む。そもそも原義は古代マケドニア王国 (archaio Makedoniko Vasileio) の意である。古代マケドニア王国の最盛期の領域はバルカン半島の中央部を占め、これが広義のマケドニア（上記 β および γ ）であり、ここでは広域

マケドニアと呼んでおくが、この広域マケドニアは、マケドニア王国がローマに滅ぼされ、その後ビザンティン帝国、オスマン帝国の支配を経た近現代になって、ギリシア人、ブルガリア人、スラヴ人、ヴラフ人、アルバニア人などが住む複雑な民族的様相を呈した地域となった。そして、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ギリシア、ブルガリア、セルビア、アルバニアの争奪の対象となり、「マケドニア問題 (Makedoniko Zetema)」として様々な紛争の種となった⁴⁾。バルカン戦争 (1912, 1913年) 後にギリシアが獲得した地は広域マケドニアの一部であり、その後西トラキアを加え、現在のギリシア共和国の北部を占めるマケドニア地方となった。このギリシア内のマケドニアはかつての古代マケドニア王国領域のおよそ65パーセントをしめ (Borza 1999: 20)、王国の主要都市の遺跡があるヴェルギナ (Vergina) やペラ (Pella)、ディオーン (Dion)、テッサ



図1 現在のギリシア共和国とバルカン諸国（ブルガリア共和国、マケドニア旧ユーゴスラヴィア共和国、アルバニア共和国）、およびトルコ共和国

ロニキ (Thessalonike) 等が分布する中心地域を含む（上記α、図1および2参照）。

本稿においては、「マケドニア」を現在のギリシア共和国領域内のマケドニア地方とし、この地における考古学について、ギリシア考古学における位置づけを確認しつつ、その成立と展開に関する学史的整理を行ない、その評価と今後の展望について述べる。

主題の背景

ギリシア共和国内のマケドニア地方の考古学調査および研究は、南部のギリシアのそれと較べて大幅に遅れて開始された。M. アンドゥロニコス (Andronikos) によれば、その理由は以下の2つである。つまり、「第一に、(近代の) 古代ギリシア研究の先駆者たちが、欧州社会において教養として親しまれた古典において有名な場所の調査に没頭したこと」であり、「第二に、マケドニア地方は1912年までオスマン・トルコの支配下にあり、学術的調査が不可能であったこと」である (Andronikos 1988: 1)。

実際、マケドニア考古学は、欧米文化の形成に深く関わるギリシア考古学と関連し、また一方では欧州の近代諸国家成立や民族問題の理解なくして語る事が不可能であるほど近現代史と共に歩を進めてきた。本稿では、主題において編年的にマケドニア考古学の成立と展開を整理する前

に、その理解の背景として、上述のアンドゥロニコスの言に従い、ギリシア考古学における古代マケドニアの位置づけについて、次に近現代史におけるマケドニアについて概略的に述べる。

1. ギリシア考古学と古代マケドニア～現代の南北ギリシア

ギリシア考古学は、その対象とする時代により、先史考古学および古典考古学、ビザンティン考古学の3分野に大別され⁵⁾、各々がギリシア近代国家の成立と発展に密接に関わってきた。K. コチャークス (Kotsakis) によれば、ギリシア考古学は19世紀を通じて古代史と古典学と堅く結びつき、新生ギリシア国家の教育と文化において、そして国家統一の観念形成において中心的役割を演じた (Kotsakis 1998: 45; 2003: 56)。そして考古学の3分野は新生ギリシア国家の発展の流れに応じて各々時期を違えて社会の舞台に登場し、学問として形成され、そして発展していった。つまり、これらは同じ考古学の名の下にあるが、各々学問的起源や目的、方法が異なり、互いに独立して発展してきた側面を持つ⁶⁾。

ギリシア考古学の3分野と近代ギリシア国家における発展は、以下のように概略されるであろう。欧州においてギリシア古典考古学は古典学研究の流れを汲み、その研究史は中世迄も遡り、ヨーロッパ人のアイデンティティにもそ

のまま関わるものであり、欧州史の流れをそのまま反映していたといえる。ギリシアは、18世紀末から19世紀初頭にドイツを中心に起こったロマン主義の影響を受けて、1832年に近代国家として成立したが、そもそもこの国家の成立とその後の国家統一の原動力として欧州の祖としての古代ギリシアへの憧憬があり、ギリシア古典考古学は必要不可欠な立役者であった。一方、欧州において17世紀以来めざましい進歩をとげた科学の研究により19世紀後半に至り先史時代という観念が確立し、先史考古学が成立するが (Daniel and Renfrew 1988; Morris 1994)、ギリシアでは、この先史考古学が近代国家独立後、ギリシア人の起源を追究する民族主義的道具として持上げられた経緯を持つ (Kotsakis 1991: 70-71)。そしてビザンティン考古学は、近代ギリシアがエーゲ海周辺に分住するギリシア民族をまとめ上げ、かつてのビザンティン帝国の領土を本来のギリシアの領土としてそれを回復する「メガリ・イデア (Megale Idea)⁷⁾」を実現する手段として、そして先史考古学および古典考古学の対象とする時代から近現代のギリシア国家への「過去との連続性 (the continuity with the past)」を証明する手段として、19世紀後半以降に盛んに研究されるようになった (Kotsakis 1998: 49-55)。

上述のような経緯を経たギリシア考古学であるが、3分野のなかで現在に至るまで依然として重要視されているのは古典考古学である (Kotsakis 1998: 59; Shanks 1996)。ビザンティン考古学は、ビザンティン帝国の第二の都であったテッサロニキにおいて注目され、マケドニア地方のギ

リシア編入時 (1913年) に国家戦略的に重要な役割を演じたが⁸⁾、そのマケドニア地方の考古学においてもビザンティン考古学や先史考古学よりも古典考古学に対する関心が高い。ギリシア民族の「過去との連続性の追求 (the quest for continuity with past)」と「民族継承 (ethnogenetic)」の側面から1925年に書かれた K. パパリゴプロス (Paparrigopoulos) の『ギリシア民族の歴史 (Istoria tou Ellenikou Ethnous)』 (Athens: Eleftheroudakes) や、1970年に G. クリストプロス (Christopoulos) らが著した同名の本 (Athens: Ekdotike Athenwn) を受けて、マケドニアでも1982年に M. サケラリウ (Sakellariou) の『マケドニア：ギリシアの歴史と文化の4000年 (Makedonia: 4000 Chronia Ellenikes Istorias kai Politismou)』 (Athens: Ekdodike Athenwn) が出版されたが、先史時代についてが15頁、古典古代が194頁、ビザンティン時代が127頁、近現代が71頁の配分であった (Kotsakis 1998: 51-52)。もっとも、南部ギリシアが「過去との連続性」や「民族継承」的側面を重視するのとは異なって、マケドニアにおいては民族のアイデンティティがより重要であるという傾向があるが、いずれにせよ、古典古代への関心の高さは特徴的である。

そして、このギリシア考古学における古典考古学への関心の高さは、ギリシア考古学においてマケドニア考古学が南部のそれに遅れをとった理由に直接関係するのである。

欧州の列強は、近代ギリシア国家の独立後、欧州文化の源流を求めて、また他方では骨董嗜好への商業的目的のた

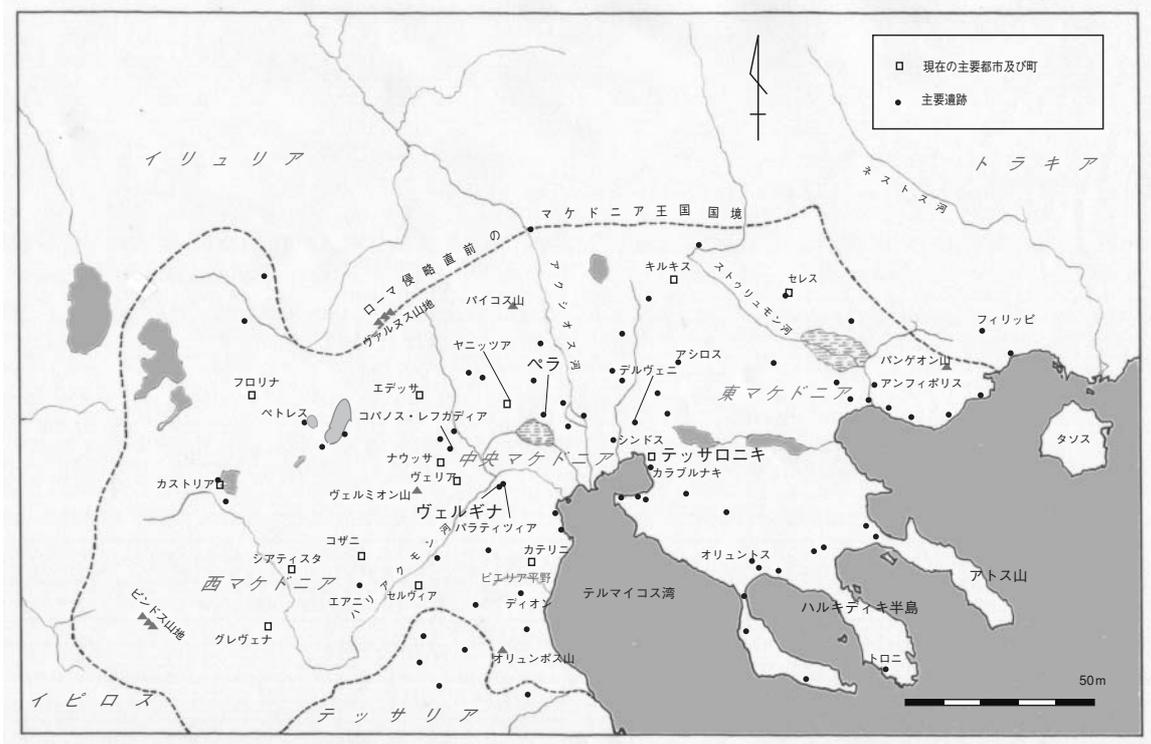


図2 マケドニアにおける遺跡 (先史～ビザンティン期) 分布図

めに、ギリシアの地の発掘を開始した。フランスはいち早くアテネに考古学研究所 (École Française d'Athènes) を置き (1846年)、1850年代初めにアテネのアクロポリスの調査を手がけ、1860年代にはギリシア各地の発掘調査に乗り出した。ドイツがフランスに続きアテネに考古学研究所 (Deutsches Archäologisches Institut Athen) を置いたのもこの頃 (1874年) であった。1871年にビスマルクにより統一され新たなナショナリズムが高揚していた時期であったが、シュリーマンのトロイアやミケーネでの発掘やオリンピアにおけるドイツ隊の大掛かりな発掘調査は新生ドイツの新たな自己発露であった (Morris 1994: 25)。これらに続き、米国も古典学研究所 (American School of Classical Studies) を設立し (1881年)、1890年代にシキュオンやスパルタ、コリントスなどの発掘を開始した。英国も考古学研究所 (British School at Athens; B. S. A.) を設置 (1886年)、キプロスやペロポネソス半島で発掘調査を開始し、1890年代にはミロス島で初めての大規模発掘を行なった。

これらの発掘調査地は云うまでも無く、古文獻にその地名が頻出し、当時の欧州において古典教養の書物の上で親しまれた物語の舞台であり、位置的には、現在のギリシア共和国の中央及び南部地方やエーゲ海島嶼部に集中していた (Andronikos 1988: 1-2)。

一方、古典文獻におけるギリシアの他の地方、つまり、マケドニアを始めとしたイピロスやテッサリア、トラキアなどに関する言及は極めて少ない。マケドニアについては、紀元前5～4世紀の古文獻が残るが、主に当時マケドニアの敵方であったアテナイの著述家たちによるものであり、文明人が夷狄に向けた眼差しを以って些か興味本位あるいは軽蔑に満ちた書き方であった⁹⁾ (Borza 1990: 21)。特に、アテナイの政治家デモステネス (Demosthenes: 紀元前384?-322年) がフィリッポス2世 (Philippos II: 在位紀元前359-336年) やアレクサンドロスらのマケドニア王に向けた酷評は、その後何世紀もアテナイのマケドニアに対する見方に影響した (Borza 1990: 5-6)。デモステネスは何よりも雄弁家であり、巧みに言葉を操る流麗なその文体はアテナイの文学的伝統の一部を形成した為、当時だけでなく後世までも西欧の教育と文化に影響を与えた。従って、近代の欧州社会の教養人は南部ギリシアの古典文化を追究し、マケドニアは眼中に無かったということがいえる。

このようにマケドニアと南部ギリシアの対立構図は古代に根差したものであるが、近現代においても社会や文化の根底に存在し続けており、政治抗争などの形をとって噴出してきた¹⁰⁾。現代ギリシアにおいても、首都アテネとマケドニアの主都テッサロニキが対照的に扱われることが多く、市民も互いにライバル意識を持つ傾向にある。現代の

ギリシア共和国の行政地区 (Peripheries) のなかでマケドニア (とトラキア) のみに閣僚レベルの長を持つマケドニア・トラキア省が置かれているのも示唆的である (Borza 1990: 6)。

2. 近現代史におけるマケドニア

近現代におけるマケドニアについては、マケドニア問題が知られている。19世紀末から20世紀初頭にかけて、衰退の途にあるオスマン・トルコのバルカン半島における領域をどのように分割するかあるいは獲得するかが列強と支配下にあった民族の関心であり、上に述べた「広域マケドニア」を狙った争奪戦が繰り広げられた。その際にギリシア、ブルガリア、セルビアは各々が民族主義を掲げて争った。各々の領土の定まっている現在において沈静化しているが、決して解決に至っていない。

19世紀末、オスマン・トルコの支配下にあった広域マケドニアは複雑な民族的様相を呈していた。最も顕著であったテッサロニキでは、ギリシア人、ブルガリア人、セルビア人、ユダヤ人、トルコ人、アルバニア人、ヴラフ人などが混住していた (Borza 1990: 8-9)。バルカン戦争の際、ギリシア軍はエーゲ海に面した重要港都市テッサロニキを目指すブルガリア軍に先駆けて数時間の差で同地を奪取し併合したのであり、ギリシアが当時もっとも敵対視したのは支配者でありオスマン帝国ではなくブルガリアやセルビアであったのは、その後の歴史的経過を見れば明らかである。ブルガリアはローザンヌ条約 (1923年) においてトラキアのエーゲ海沿岸地域を奪われ、エーゲ海から締め出された形で「大ブルガリア」の夢は潰えたが、その無念は内部に燻り、第二次世界大戦時にドイツがギリシアに侵攻した際にその占領に加担するという形で露呈した。一方、セルビア人も以前からテッサロニキ獲得を切望しており、ドイツが、マケドニア地方占領時、ユーゴスラヴィア及びブルガリア双方に対してテッサロニキ譲渡と引き換えにドイツのバルカン戦略への協力を持ち掛けたといわれている (Borza 1990: 10)。

第二次大戦後、ギリシアが内戦に突入した際も、ユーゴスラヴィアとブルガリアの両国は社会主義国として、ギリシアの共産主義者の背後からマケドニア問題を刺激し続けた (Borza 1990: 10-11)。これは、ある時はスラヴ人の「大マケドニア」の創建を、またある時はギリシアのマケドニア部分の独立を狙ったが、いずれにせよ、ギリシア国家の統一を崩す形へ導こうとした。1949年のギリシア共産党 (K. K. E.) の敗北には様々な理由があるが、一つの原因は共産党内で、ユーゴスラヴィアとブルガリアの望むマケドニア政策がギリシア民族主義と矛盾することから来る内紛が起こったことであるという。



写真1 ヴェルギナのフィリッポス2世のマケドニア墓(Ⅱ)の復元モデル。手前は英雄廟の遺構。奥にマケドニア墓(Ⅲ)の一部が見える。(Drougou and Saatsoglou-Paliadeli 1999: pl. 55)

近年になってこのマケドニア問題が再浮上してきた。1945年にユーゴスラヴィア連邦の一部として現われ、連邦解体後1991年に独立したスラヴ系の「マケドニア共和国」の名称と国章に対して、ギリシアが抗議を起こしたのである¹¹⁾。ギリシアの立場からすれば、マケドニアの名称はギリシア北部地域のみを指した。そして、また国旗に採用された国章はフィリッポス2世のマケドニア墓(Makedonikos taphos)¹²⁾(写真1)から出土した「十六条の光芒を放つヴェルギナの太陽」であり、その発見以来ギリシア側において、新聞社や銀行、公共施設などの紋として、また硬貨の表面等に使用されてきた経緯があり、一般市民に浸透していただけにその敵対感情は激しかった(Kotsakis 1998: 60)。この際、マケドニア考古学がギリシア一般市民のナショナリズム高揚を助長し、国内的には、古代マケドニアをギリシアの過去の一部として愛国心を盛り立て、一方で対外的には、他の欧州諸国に古代ギリシアの文化遺産を通してギリシア敬愛の立場で一致団結することを訴えるという役割を果たした(Kotsakis 2003: 56-57)。

主題：マケドニア考古学の成立と展開

マケドニア考古学の研究史は19世紀前半に始まるが、大きく3期に区切られる。第1期はオスマン・トルコ支配下～解放以前、第2期はオスマン・トルコからの解放とギリシアへの編入～内戦、第3期は内戦後～現代、である。

1. オスマン・トルコ支配下(～1912年)

マケドニアでは、オスマン・トルコ支配下の19世紀に欧州人による古物への興味が顕在化し始め、欧州から訪れた旅行者により各地で散見される考古学的遺物や遺構につ

いて報告されるようになった(Romiopoulou 2002: 175)。初期のものとしてはE. クジネリー(Cousinery)やW. M. リーク(Leake)の報告が貴重であるが¹³⁾、T. L. タフェル(Tafel)のラテン語による古代マケドニア研究の集成が古代マケドニアに関する初の学術的業績といえる(Andronikos 1988: 2)¹⁴⁾。

当時のマケドニアにおいて蒐集された多くの古物は、欧州に持ち去られ、又裕福なギリシア人蒐集家の手に渡り、あるいは、既に独立した南部ギリシアに設立された団体¹⁵⁾またイスタンブール考古学博物館(Istanbul Archaeology Museum)に納められた(Romiopoulou 2002: 175)。当時のイスタンブール考古学博物館の陳列品の中には北部ギリシアの各地から収集された遺物も多く、オスマン・トルコ政府により博物館活動に対する協力を命じられたギリシア人研究者もいた。K. ミロナス(Myronas)は同博物館の再編を行い(1895年)、Th. マクリディ(Macridy)はテッサロニキ郊外のデルヴェニ(Derveni)における古代マケドニアの墓遺跡の発掘に関わり、同遺跡の遺物を同博物館に収蔵した。一方、M.I. デイミツァス(Dimitzas)やパパヨルギウ(Papageorgiou)らのようにマケドニアの碑文や地理についての情報を集成し報告したギリシア人文学者もいた。

これらオスマン・トルコの支配下のギリシア人研究者の活動が非常に限定されていた一方、軍事的目的を以ってマケドニアに入った英国人およびフランス人の活動は活発であり、その結果は、奇しくもその後のマケドニア考古学研究の礎となった。従って、マケドニアの19世紀は「外国遠征軍の踏査」の世紀であったといえ、欧州人が軍事的手段を以って「マケドニアを発見」したといえる(Borza 1990: 6)。

1804年に、英国政府がW. M. リーク(Leake)をギリシアの地に視察のために派遣したのは仏軍侵攻に備えてであり、その際トルコ軍を支援する命を受けていた(Borza 1990: 12-13)。1805～1810年の間、リークは、ペロポネソス半島や中央および北部ギリシアを旅し、退役後その成果をまとめて発表した。マケドニアとその周辺地方についての踏査の成果は、*Travels in Northern Greece III* (London 1835)として公表した。

1861年に、ナポレオン3世の命を受けたフランス人考古学者L. ユゼ(Heuzee)¹⁶⁾は、マケドニアの古跡の調査を開始し、建築家H. ドメ(Daumet)の協力のもとに古都フィリッピ(Philippi)を始めとした東マケドニア、中央マケドニアのパラティツィア(Palatitsia)周辺、そして西マケドニアなど各地を調査し、詳細な報告として、*Mission Archéologique de Macédoine* (Paris 1876)を出版した。また、M. デラクロンシュ(Delacoulonche)はユ

ゼと同時期にマケドニアを踏査したフランス人であり、1859年にその報告を発表している¹⁷⁾。

オスマン・トルコ支配下における古代マケドニア研究の基礎は、最終的に、B. S. A. の研究員であった A. J. B. ウェイス (Wace) らによる調査研究活動により完成する (Borza 1990: 13)。B. S. A. においては設立当初は北部ギリシアへの民俗学的関心において論文が発表されていたが、ウェイスは独自に1906～1912年の間マケドニアを調査し、その成果を研究所の年報において報告した¹⁸⁾。1912年の時点でウェイスは古代マケドニア研究について、「今や(マケドニアの)政情は変化し始めているのであり、古代(マケドニア)の地事情に関する十分な議論をするのはまだ気が早いといわねばならない。今後の新しい発見が期待される。」と述べている (Borza 1990: 14)。ウェイスの言葉は、マケドニアのオスマン・トルコからの解放を前にして、過去の歴史遺産の眠るマケドニアの地の豊かな考古学的潜在性と今後のマケドニア考古学の発展を予見していたといえよう。当時、研究者の注目を集めていた古跡は、中央マケドニア平原と近隣丘陵に点在した多数のマウンドであった (Borza 1990: 14)。リークはその著作においてこれらのマウンドに言及しており、またウェイスも70基ばかりのマウンドと関連土器についての論文を書いている¹⁹⁾。ウェイスによれば、これらのマウンドの層には先史時代の遺跡が包含されていたという。

2. ギリシア編入以後、2つの大戦を経て内戦まで (1913～1949年)

バルカン戦争後、マケドニアはギリシア王国に編入された (1913年)。しかし、その後も第一次世界大戦の影響が中立を保とうとしていたギリシア内部を掻き乱し、混乱の時代は続いた²⁰⁾。1913～1918年にマケドニアの地には協商国英仏の前線が張られた。前線は非常に停滞的であり、時間を持て余した英仏軍人らは現地の考古学調査を始めた (Borza 1990: 14-15; Romiopoulou 2002: 175)。イギリス軍のなかには B. S. A. の会員であった士官もおり、またフランス軍には考古学部門 (Service Archéologique) が設けられていたのである²¹⁾。前線を保つ作業の一方、マケドニアの先史時代のマウンドや歴史時代の史跡に関する報告が書かれ、考古遺物が収集された。これらの調査・研究の成果はまとめられて英仏の考古学年報に発表された²²⁾。

これらの英仏の軍人考古学者たちの活動は引き続き1920年代の外国人によるマケドニアの考古学研究を活性化した。フランスは、ユゼの調査の頃から関心を持っていた地である東マケドニアの沿岸地域に入り、タソス島 (1911年) およびフィリッピで総合発掘調査を開始した。

しかし、第一次大戦前からマケドニア考古学に対してよ

り意欲的であったのは英国であり、戦時駐屯期からの大量の情報を保持していた。ウェイスは1915年の時点でハルキディキ (Chalkidike) 半島のオリュントス (Olynthos) の古跡に目を付け、その発掘調査を計画していたが、1920年にはアテネ考古学研究所の意向で南部ギリシアの発掘に向かい、結局オリュントスは米国の D. M. ロビンソン (Robinson) により1928～1938年に発掘調査された²³⁾。ここにおいて、マケドニアのフィリッポス2世により陥落した (紀元前348年) 大規模な都市遺跡がその全貌を現した。

ウェイスを引き継いだ英国人キャソンも元軍人であったが、1921～22年にアクシオス (Axios) 中流域の発掘調査を行った。1926年には、B. S. A. および自身の調査の成果を踏まえて、*Macedonia, Thrace and Illyria* (Oxford) を出版したが、これは北部ギリシアの歴史の曙から古代マケドニア王国のフィリッポス2世に時代に至るまでの通史を書いた初めての試みであった。同時期、同じく B. S. A. の会員であったヒュートレイはマケドニアの各地に分布する墳丘の調査に着手した。1920年代を通じて、中央および西マケドニアの調査を遂行し、先史時代の編年を確立して古代マケドニアと南部ギリシアの関係を示唆した。ヒュートレイはウェイスと同様、南部ギリシアの発掘調査のためにマケドニアを去るが (1931年)、マケドニアにおける調査・研究の成果は第二次大戦直前になって *Prehistoric Macedonia* (Cambridge 1939) としてまとめ、後に自身が「マケドニア先史学の父」と呼ばれる業績となった。

一方、ヒュートレイは1929年英国考古学研究所の若い研究者をマケドニアに引率したが、その中に N. G. L. ハモンド (Hammond) がいた。ハモンドは1930年代にピンドス (Pindos) 山脈をイピロスからマケドニア、テッサリアにかけて踏査した。第二次大戦中は、英国軍に所属しギリシア人レジスタンスとの連絡将校としてマケドニアに駐屯し、マケドニアとテッサリアの地事情に精通することになった。大戦後の1967年にイピロスについての調査結果を出版した。その後もマケドニアを含めた北部ギリシアの歴史地理研究を進め、様々な著作を重ね、1970年代になって大著、*History of Macedonia* (Oxford 1972, 1979, 1988) をまとめ上げた。ハモンドは歴史事情と共に地理にも重きを置き、それまで明らかになった古代マケドニアの全てをその本に凝縮させたといえる。そして最も際立った特色としては、それまで独自に遂行されてきたブルガリア及びアルバニア、ユーゴスラヴィア、ギリシアの先史考古学の成果を統合したことが挙げられる。先史時代における民族移動に関してハモンドの用いた方法や至った結論に対する不満や異論も見受けられてきたが、非常に完成度の高い統合的な研究であり (Borza 1990: 16-17)、現在におい

でも貴重な著作である。

これらの外国人による考古学研究が活発に行われる中、1913年のマケドニアのギリシア王国編入に際し、いよいよギリシア考古学局 (Ellenike Archaialogike Yperesia) の活動がマケドニアの地においても開始された (Romiopoulou 2002: 174-176)。ギリシア考古学局に課せられた仕事には2つの戦いがあった。一つ目は、出土した文化財を保存・保全し、また当時多かった盗掘から守る戦いであり、二つ目は、ギリシアの文化財の外国博物館への流出を防ぐ戦いであった。これらの保護活動は不幸にも完全に遂行され得ず、戦時の発掘調査による出土品の多くは持ち出され、現在でも英仏の博物館に収蔵されている。1941～1944年のドイツおよびブルガリアの侵略時にも多くの文化財が流出の憂き目をみている。

これらの文化財保護活動と同時に、考古学局は様々な考古学調査プロジェクトを打ち出したが、まず重要視したのはビザンティン考古学であった (Kotsakis 1998: 47-49)。ビザンティン考古学は、実際は既に19世紀から外国人研究者とギリシア人研究者の共同研究を促した分野であり、関心はテッサロニキに集中してきた。テッサロニキは古くはローマ帝国のガレリウス (Galerius) 帝の王宮が置かれ、ビザンティン帝国期は首都コンスタンティノープルに次ぐ第二の都市として栄えたが、この地において、多くの歴史的建造物、特に、オスマン・トルコ時代にモスクとして使用されたビザンティン帝国期の教会の発掘調査と修復が行われることとなった。発掘調査は、テッサロニキ市街地を襲った大火災の後、1917年に市街地中心部において開始され、主要なビザンティン期の建築遺構が次々に調査された。もっとも、13～15世紀にマケドニア及びセルビアやアトス山 (To Agio Oros) で活動した中世ビザンティン美術の学派や作風や画家らについて、主に外国人研究者同士の見解の一致で定義されたが、中世画家の学派や出自についてのギリシア文化遺産を守るのみになったにせよ、ギリシア人研究者もこれらの外国人による調査研究に続いてビザンティン考古学の研究に参加したことは重要である (Kotsakis 1998: 48)。

テッサロニキのビザンティン的特色は、ビザンティン文化が「純粋にギリシアのもの」であるという思想に結び付けられ、「過去との連続性」を求める新生ギリシアの要求に合致していた (Kotsakis 1998: 49)。ギリシアは独立当初、古代ギリシアを賛美し中世ビザンツの存在を忌み嫌う風潮があったが、19世紀半ばごろに古典古代から現代のギリシアの歴史を断絶のない連続した形で捉えようという動きの中で、中世への関心が芽生えた²⁴⁾。ギリシアの過去との連続性の追求は、早く独立した南部ギリシアから新しく加わったマケドニアに託されたのである。マケドニアに

対する歴史的無関心は撤回され、マケドニア、特にテッサロニキのビザンティン文化遺産は、古い南部と新しい北部を結びつける強力な磁石となり、ギリシア王国の国家統一のプロジェクトに組み込まれた。象徴的なのは、1926年に設立されたギリシア第二の総合大学であるテッサロニキ大学が、その正式名称をアリストテレスから採る一方、紋章に聖デミトリウス (Demetrios) を採用したことである²⁵⁾。

一方、ギリシア考古学局やテッサロニキ大学の主導により、テッサロニキ以外のマケドニア各地でも発掘調査が開始された。考古学局の G. イコノモス (Oikonomos) はいち早く1914年にペラの発掘に着手した。1930年代に Ant. ケラモプロス (Keramopoulos) は西マケドニアの調査を行った。S. ペレキディス (Pelekidis) がまとめたテッサロニキの碑文研究²⁶⁾を P. パパヨルギウ (Papageorgiou) が引き継いだ。また、テッサロニキ大学の初の考古学教授には、G. ソティリアディス (Sotiriadis) と K. A. ロメオス (Romeos) が就任したが、ソティリアディスは古代マケドニアの聖都市ディオ (Dion) の発掘に着手した (1928～1931年)。この調査により、ローマ期周壁の一部とマケドニア墓一基、古キリスト期の建築遺構が出土した。その一方、ロメオスは、テッサロニキ近郊のカラブルナキ (Mikro Karabournou) における短期間の発掘調査の後、フランス人考古学者ユゼのパラティツィアにおける発掘を引き継いだ (1938年)。この際、古代マケドニアの王宮跡及びマケドニア墓一基が出土した。当時は二つの世界大戦の間の時期にあたり、またメタクサス (I. Metaxas: 1871-1941) の独裁体制にある厳しい世情の中ではあったが、ギリシア人研究者は自らの手でギリシアの地を発掘するというに大きな意味を感じていた。1941年にロメオスが、当時のマケドニアにおける考古学者ツンタス (Tountas) によるカラブルナキの発掘について描写した文章によると、発掘の指揮を執るギリシア人考古学者のみならず、ギリシア人作業員にも自らの手で故国の地を発掘するという感慨と熱意に溢れており、発掘隊には外国人研究者が指揮する隊とは異なった一体感が存在したという (Kotsakis 1998: 48)²⁷⁾。因みに、ロメオスが発掘していたパラティツィアの発掘現場のすぐ隣には、1923年のギリシアとトルコの住民交換のためトルコから移住してきたギリシア人のヴェルギナ村が建てられており、発掘作業員としてこのような避難民が雇われていたと考えられ、ロメオス自身の想いの深さも想像に難くない。

以上のように、オスマン・トルコからの解放後のマケドニアにおいても欧州の列強による精力的な調査活動が続けられたが、幸か不幸か南部ギリシアと比較して関心の度合

いは少なかったため、考古学研究の余地は十分に残されたといえる。そして、解放と同時にギリシア人自身の手による調査・研究活動が開始された。しかし、第一次大戦と内戦が暗い影を落とし、研究は遅々としていた。1939年に欧州は第二次大戦に突入し、ギリシアもイタリア、ドイツ、ブルガリアに侵略され(1940～1944年)、更にこれに内乱の時期(1943～1949年)が続き、マケドニアの地における調査・研究活動は、ドイツとフランスによって行われた一部の小規模発掘以外は完全に中断した(Borza 1990: 15-17)。

3. 内戦後から現代(1950年～)

1949年に内戦に正式な終止符が打たれ、ギリシアに復興への道が拓かれることとなった。1950～1960年代は内戦の後始末が尾を引き、軍事政権の権力掌握(1967～1974年)など政治的には大きな波乱があったが、経済は徐々に上向き、市民の生活は向上していった。

この1950年以降から現代に至って、二つの傾向がマケドニア考古学を特徴づけた(Borza 1990: 17)。第一に、マケドニア地方の各地で本格的発掘調査が始まり、古文書で言及されていた多くの地名が確認されるに至った。第二に、多くの発掘調査がギリシア人研究者の手によって為されることとなった。これらの傾向は上述のように戦前にもみられていたが、その規模と数においてわずかであり、戦後における発掘調査のそれとは比較にならなかった。

実際、1950年以降、ギリシア考古学局やアテネ考古学協会などの団体組織、テッサロニキ大学などが出資して、組織的な発掘調査が行われた(Borza:17-18; Romiopoulou 2002: 176)。

中央マケドニアでは、1970年代も後半に差し掛かる頃、ヴェルギナにおいて、巨大な墳丘の下にフィリップス2世のものとは比定されるマケドニア墓²⁸⁾が発見された(写真1)。この比類なき埋葬建造物とその絢爛豪華な副葬品はマケドニアのみならずギリシアおよび欧州の注目を集め、戦後のマケドニア考古学の大きな飛躍につながった。ヴェルギナの遺跡は、この王墓の墳丘を含む墓域と都市部から構成され、都市部においては、これまで、周壁・アクロポリス・王宮・劇場・神殿・公共建築物・邸宅が出土しており、テッサロニキ大学の主導により現在も調査が続行している(Drougou and Saatsogkou-Paliadeli 1999)。一方、フィリップス2世とアレクサンドロスの新王都であるペラにおいて、方格状都市計画の一部とみられる造成区画が出土し²⁹⁾、その区割りの中心と見られる付近に広大なアゴラが姿を現し、その北の緩やかな丘陵上に王宮跡が発見された。その他、神殿・公共施設・作業場・浴場・邸宅が出土し、都市部周辺にある墓域からは古典期からローマ期にか

けての墓地が出土、また都市部中央を東西に切る王道と呼ばれた幹線道路に沿った郊外地域にマケドニア墓が多数出土している(Akamatis 2004)。また、オリュンポスの麓に位置した聖都市ディオンではヘレニズム期およびローマ期の都市部と広大な聖域部が明らかになった。ヴェリア(Veria)ではヘレニズム期からローマ期を経てビザンティン期に至る文化財の存在が認められ(Brocas-Deflassieux 1999)、エデッサ(Edessa)では段差をもたらず特徴的な地形に沿って周壁が出土した。コパノス・レフカディア(Kopanos-Lefkadia)では多数のマケドニア墓が出土し、古代のミエザ(Mieza)が置かれた地であることが判明した。テッサロニキにおいても、旧市街地内にローマ期ビザンティン期のみならずヘレニズム期および古典期、古拙期まで遡る建築遺構が出土、その新市街地には先史時代の集落遺跡が見ついている。テッサロニキ周辺では、北側のデルヴェニ(Derveeni)で紀元前4世紀の見事な墓の一群が出土、西側のシンドス(Sindos)で古拙期から古典期にかけての墓の一群から金細工を含む豊かな副葬品が出土、東側のカラブルナキでは青銅器時代から古典期の集落跡が明らかになっている。

西マケドニアでは、ペトレス(Petres)やエアニ(Aiane)において丘陵上にヘレニズム期に栄えた都市遺跡が調査され、コザニ(Kozani)においては青銅器時代からローマ期に至る一貫した古跡の存在が明らかになった。

東マケドニアでは、ストゥリュモン(Strymon)河畔の戦略的地点に位置し古代マケドニアにおいても重要な古都市であったアンフィポリス(Amphipolis)において、広大な区域が調査された。その他、多くの集落遺跡が調査されている。

これら戦後のマケドニア考古学を進めたギリシア人考古学者は、M. アンドゥロニコス、G. ヴァカラキス(Vakalakis)、



写真2 ペラ遺跡航空写真。南より撮影。
(写真提供：テッサロニキ・アリストテレス大学)

K. デスピニス (Despinis)、D. ラザリデイス (Lazaridis)、Ch. I. マカロナス (Makaronas)、D. パンデルマリス (Pandermalis)、Ph. ペツァス (Petsas)、K. ロミオプルー (Rhomipoulou)、M. シガニドゥ (Siganidou)、I. ヴォコトプルー (Vokotopoulou) らであり、テッサロニキ大学あるいは考古学局の研究者たちであった。そして、テッサロニキ大学と文化省により 1987 年からマケドニア各地の発掘調査の成果を集成した学術雑誌「マケドニア及びトラキアにおける考古学研究 (Archaiologiko Ergo ste Makedonia kai Thrake)」(A. E. M. Th.) が毎年発行されることとなり³⁰⁾、マケドニアにおいて、先史および古典、ビザンティン考古学を含め、毎年平均 40 プロジェクトが進行している。

これらのギリシア人による発掘調査の一方、戦前からの外国隊による発掘調査は戦後も何らかの形で継続され、また少数であるが新たに開始された調査もあった³¹⁾。1911 年に始まったフランスによるタソス (Thasos) 島における発掘調査は戦後も継続し、1938 年に開始され戦時には中断していたサモトラキ (Samotrake) 島における発掘調査は 1948 年にニューヨーク大学により再開された。また、英国人によるネア・ニコメデア (Nea Nikomedeia) における調査では新石器時代の集落が確認されている。英国はテッサロニキ近郊のアシロス (Assiros) でも調査を行っており、一方、ドイツはキルクス (Kilkis) 県のカスタナ (Kastana) において青銅器時代の遺跡の調査を行っている。また、アテネ考古学協会の後ろ盾でオーストラリア調査隊がハルキディキ半島のトロニ (Tolone) の調査を行っている³²⁾。

マケドニアの歴史地理に関する総合的研究はハモンドの著作がいまだ有効であるが、その後の重要な研究には、F. パパゾグルウ (Papazoglou) のローマ期のマケドニア集落遺跡の集成³³⁾ や、D. サムサリス (Samsaris) の東マケドニアの地理歴史研究³⁴⁾ がある。一方、マケドニアの先史時代から近現代までの通史が、1982 年のサケラリウの著作『マケドニア：ギリシアの歴史と文化の 4000 年』で初めて実現した³⁵⁾。

以上が 1950 年以降のマケドニア考古学における調査研究の概略であったが、これと密接に関連していたのが、国の文化財行政であった。1956 年以降、国は北部ギリシアの文化財保護に大きな予算を投入し、外交向けの「考古学マーケティング」ともいえる文化事業に乗り出した (Romipoulou 2002: 176)。テッサロニキ、カヴァラ (Kavala)、フィリッピ、コモティニ (Komotini)、フロリナ (Florina) に考古学博物館が建設され、各地で遺跡が整備されるなど文化環境を整えられた。特にヴェルギナにおける王墓の発見以降、マケドニア考古学は海外からも大

きな注目を浴び、1978 年のテッサロニキ考古学博物館における「マケドニアの財宝展」は欧州委員会から表彰され、知名度は一層上がった³⁶⁾。

評価と展望：今後のマケドニア考古学

以上のような成立と展開を遂げたマケドニア考古学であったが、現在でも各地でギリシア人研究者を中心に着々と調査が行われ、研究が営まれている。マケドニア考古学界の中心となるのは、A. E. M. Th. 学会であり、年報の刊行に合わせて毎年春にテッサロニキ大学哲学部にてシンポジウムが開催され、マケドニア各地の発掘調査および研究の結果が報告されている。欧州諸国との研究者間の交流も活発であり、また EU 諸国間でのエラスムス・プログラムなどの交換留学も盛んで学生の知見も広がっている。また、2004 年のアテネ・オリンピック開催以降、市民や外国人に向けた文化財情報網が整備され、文化環境の充実が進んでいる。

この状況には、他者に侵略・統治された時代の長かったギリシア人が、どういう理由であれ、北の辺境地域で何世紀ものあいだ眠り続けていた自国文化の最後の砦を、自らの手で覚醒させ、自己の遺産として認識してきた結果が示されている。これまでみてきたように、その内面の感情は複雑であり、一方でギリシア人としての自己認識、そして他方で南部ギリシアに対するマケドニア人としての自己認識が、共に交錯しているといえる。ただし、国や民族のアイデンティティに直結しがちな考古学という学問において、自らの文化財を自らの手で発掘し守るという意味で好ましい結果をもたらしているといえる。また、遺跡および遺物の発見や調査、保存が、ほぼ初段階から学術的目的と手段を以って遂行されてきたということも、好ましい側面として挙げられる。

一方、逆に自らの歴史再構築の過程が、しかるべき学術的調査および研究を妨げる、あるいは、その可能性を限定するという側面も見受けられてきた。調査および研究が、現代のマケドニアの人々の関心の方向あるいはそのアイデンティティの構築に有利な方向においてのみ行われ、研究者の交流範囲がほぼ欧米のみであるという側面である。これは、南部ギリシアの考古学が、良かれ悪しかれ、欧米を通じて欧米以外の地域の考古学と交流する機会が与えられているということと対比される。

以上を踏まえて、今後のマケドニア考古学の発展に向けて筆者が提言する課題は以下の 2 点である³⁷⁾。

α. 専門分野間の協力

マケドニア考古学における先史および古典、ビザンティン考古学の 3 分野について、発掘調査における協力関係は存在すると見られるが、一貫した歴史の再構築に必要であ

ると考えられる積極的な協力体制はつくられていないように見受けられる。特に方法論的な練磨を目的とした意見交換が必要であると思われる。

現状としては、まず先史考古学は文字の無い時代を対象としており日本の考古学と同様の方法を実践する一方、古典およびビザンティン考古学は文献史料が十分にある歴史時代を対象とし、過去における文明化された社会の研究を目的として美術史や古典研究等の分野の方法を実践している。つまり両者を分かちものは対象だけではなく、その研究方法でもあり、前者は、物質を通して過去の社会を有機的に復元する方法を早くから模索すべき立場にあり、紆余曲折の末に科学的仮説証明方法（演繹法）を採用するに至っている一方、後者は、伝統的に遺物自体を分析する方法（帰納法）を採用してきた。この分野間の方法的相違を互いに認識してお互いに情報交換をした上で、方法論を活性化させる必要があるのではないかと考える。

β. 周辺諸国との協力

広域マケドニアは、現在、ギリシア共和国、ブルガリア共和国、マケドニア旧ユーゴスラヴィア共和国、アルバニア共和国、の国境線により分かたれていることは既に述べた。マケドニア考古学の研究のためには、これらの諸国にトルコを加えた隣国同士の学術的交流および協力が不可欠である。しかし、これを阻む大きな壁として、東欧諸国とはマケドニア問題を軸にした政治的緊張、そしてトルコとは長年の不幸な関係により培われた不信感と敵対心が、存在する。これらの問題は複雑かつ根本的なものであるため、この壁を越えた研究者の交流は非常に困難である。しかしながら、(外国人ではあるが) ハモンドの研究にみられたように、地道な調査がその壁を乗り越え、実を結ぶこともありうる。ギリシアの研究者が欧州以外に隣国や東欧にも目を向けた積極的な交流を行なうことを期待したい。

おわりに

マケドニア考古学の研究史は、単に古代のみならず中世および近現代をも視野に入れて研究すべき複雑な要素が絡み合っている。特に日本の研究者の理解を超える民族および政治的な問題が交錯し、一面的な見方では全体像の把握すら困難である。更に、ギリシア考古学との関連は非常に重要である。ギリシア考古学が欧州のアイデンティティ形成に直接関係し近代ギリシア国家成立のみならず欧州全体の歩みと共にあったことは既に述べたが、ギリシア考古学とマケドニア考古学の関係は、あえて言えば、遠く古典古代にまで遡るといえ、近現代におけるマケドニアの立場にも影響している。

筆者の今後の方針としては、マケドニア考古学研究史を深めつつ、ギリシア考古学研究史を近現代史および周辺地

域の通史と現状を視野に入れつつ、研究を進めていくことを考えている。因みにこの分野の研究に関わっているのは欧州の研究者に多い一方、ギリシア人研究者自体は少ない。しかも、ギリシア考古学研究史に関わる数少ないギリシア人研究者のなかでは社会学などの他分野出身が多く、考古学研究者は殆どいない。ただ最近になって、徐々に若い世代を中心に関心を持つ考古学者も出てきたことは評価できる。2007年1月、アテネにおいて「20世紀のギリシアにおける、古代と考古学そしてギリシアであること (Archaioteta, Archaologia kai Ellinikoteta sten Elladotou Eikostou Aiwna)」という主題を掲げたシンポジウムが開かれ、考古学者や歴史学者が集ったが、これはギリシア人が現代の国際社会の中に自らを再定義して自己の歴史を見直していこうという姿勢を示していることに相違ない。このような動きを捉えつつ、ギリシアや欧州の立場とは全く異なったアジアの立場から見たギリシア考古学の全体像を把握することは意義深いことであると確信している。

ここで更に、先に述べたマケドニア考古学に対する提言に加えて、ギリシア考古学全体に対して、ギリシア人考古学者が欧州以外へも関心を持つことを望みたい。

現在、ギリシアと欧州諸国研究者間の交流は活発であり、またEUに加盟してからその傾向は更に強くなった。そして、筆者が見る限り、学術文化交流のみならず、研究の関心もエーゲ海から西へ向けられている。例えば、アレクサンドロス大王の東征の後展開されたヘレニズム文化の東進についてはギリシア人研究者の研究対象に入らず、関心は全く持たれていない。これに関しては、ギリシアの高校の歴史教科書を見ればわかることであるが、アジアをはじめとした欧米以外の地域に頁が殆ど割かれていず、義務教育の時期に極めて限定された歴史観が形成されているように見受けられる³⁸⁾。いずれにせよ、筆者は、ギリシア人の研究者に対して、自国の絢爛たる栄光の歴史のみにとどまらない広い世界史的視野をもつことを今後期待する。

謝辞

本稿の執筆に際し、ご教示くださったギリシア国立テッサロニキ大学哲学部先史学教授のK.コチャーキス先生に心より感謝申し上げます。また、本稿の内容は、筆者のギリシア留学中の経験に基づく見解を含む。留学中に公私ともどもお世話くださり、また現在に至るまでご高配くださるテッサロニキ大学哲学部古典考古学教授のI. M. アカマティス先生に深く感謝して、ここに記します。

なお、本稿は、財団法人松下国際財団の2006年度研究助成による成果の一部である。

凡例

1) 転写と語句：名詞に関して以下の留意点を示す。なお、ギリシア語に関しては慣用化しているもののみを古典語読みで、研究

者名及び地名などは現代語読みとした。

【固有名詞】慣用語はカタカナのみで記した。それ以外に関し、地名および人名についてはカタカナに転記しその後の()内に原語をラテンアルファベットで記した。なお、必要に応じて、人名には存命あるいは在位期間を記した。

【一般名詞】適宜邦訳し、場合によってはカタカナに転記し()内あるいは註釈に原語と若干の説明を加えた。

- 2) 文献：ギリシア語文献についてはラテンアルファベットによる略語を付した。参考文献以外の本文中および註釈に記した文献は基本的に孫引きであるため、原語でのみ記した。
- 3) 図版：参照図版に関しては、本文中の()に通し番号を挿入した。出展に関しては各図版下の()内に記した。

註

- 1) Μπαμπινιώτης, Γ. 2002 *Λεξικό της Ελληνικής Γλώσσας*. Αθήνα, Κέντρο Λεξικολογίας Ε.Π.Ε.
- 2) ()内は筆者の補足説明。
- 3) アレクサンドロス大王 (Αλέξανδρος ΙΙΙ: 在位紀元前336-323年) 期以前の最盛期には上記βの広域を支配した。
- 4) パルカン戦争前の19世紀末から20世紀初頭に激化した。所謂マケドニア戦争 (1903-1908年) はその例である。マケドニア問題については後述。
- 5) 伝統的に、先史考古学は、旧石器時代、新石器時代、青銅器時代 (キクラデス文化およびミノア文明、ミケーネ文明を含む)、暗黒時代を、古典考古学は、幾何学文様時代、古拙 (アルカイック) 期、古典期、ヘレニズム期、ローマ期を、ビザンティン考古学はビザンティン帝国期を、各々研究対象とする。
- 6) 筆者は2007年3月にギリシア国立テッサロニキ大学哲学部先史学のK. コチャキス (Κωτσάκης) 教授と面会した際に、先史考古学と古典考古学との学問的断絶についてのお話を伺った。なお、ビザンティン考古学については、筆者のギリシア滞在 (1997~2003年) 中の経験上、先史考古学と古典考古学との断絶以上にこれらの二分野と隔たりの印象を受けた。
- 7) 1844年に第一憲法を生み出した論争で、I.コレッティス (Κωλέττης) により導入された概念。近東のギリシア人居地すべてを一つの国家に統一すべきという主張を掲げた。(クログ2004: 54; Kotsakis 1998: 55-56)
- 8) 後述。
- 9) 例えば、トゥキュディデスはマケドニア民族がアジアかアフリカの習俗を以って暮らしているかのように描いている (Θουκυδίδης 2.99)。また、イソクラテスはあからさまな敵意は避けつつもデモステネスの影響を受けた見方をしている (Ισοκράτης 5.108, 154)。
- 10) 第一次大戦中、ギリシア内部では参戦をめぐってE. ヴェニゼロス (Βενιζέλος) と国王との間に対立が起こり、1916年にヴェニゼロスがアテネに対抗してテッサロニキに臨時政府を建てた。テッサロニキでは近年トルコから解放されたばかりであり、ヴェニゼロスの運動を熱烈に迎え入れた。英仏列強の協力によりヴェニゼロス派は、1917年に王党派を追放してアテネに戻り、ヴェニゼロスは首相の座に返り咲いた。このような政治的対立はその後も続き、1950年代末から1960年代においても、アテネの右派政治家や軍人はテッサロニキの左派政治家や大学生らに強い敵意を抱いていた。(Borza 1990: 6; クログ2004: 81-83)
- 11) ギリシアは国名と国章への抗議に加えて、憲法にマケドニア領土に対する野心を示唆する条項があると主張した。更に各国がこの新生国家を承認しないように努力した。「マケドニア共和国」は1993年に国際社会向けの正式名称として「マケドニア・旧ユーゴスラヴィア共和国」を使用することで妥協しようとしたが、ギリシア側は1994年当時のパパンドレウ (Α. Παπανδρέου) 首相がマケドニア共和国に対し経済封鎖の手段を講じた。しかし逆にその他のEU加盟諸国により欧州司法裁判所に提訴された。米国の圧力もあり、1995年には両国の関係は改善に向かったが、国名の問題の根本的解決には至らなかった。(クログ2004: 237-240)
- 12) 後述。
- 13) クジネリーの著作は、*Voyage dans la Macédoine* (Paris 1831)。リークの著作については後述。一方、19世紀に先立ち、18世紀に、J. スチュアート (Stuart) とN.レヴェット (Revet) がギリシアの各地の遺跡遺構をスケッチした画集*Antiquities of Athens* (London 1784) を出版したが、これにはテッサロニキのローマ期の回廊遺構の図が含まれていた。この回廊遺構の一部は1864年にルーブル博物館に収蔵された。(Andronikos 1987: 5; Kotsakis 1998: 46)
- 14) タフェルは、1835年、1839年、1841年に著作を発表した。
- 15) 例えば、考古学協会 (Αρχαιολογική Εταιρεία) など。
- 16) ユゼは在アテネ・フランス考古学研究所の会員であった。(Andronikos 1988: 6)
- 17) Delakoulonche, M. 1859 *Mémoire sur le beceau de la puissance Macédonienne, Archives des missions Scientifiques et littéraires VII*. Paris.
- 18) Wace, A. North Greek Festivals and the Worship of Dionysos, *BSA XVI* (1909-1910): 232-253; The Mounds of Macedonia, *BSA XX* (1913-1912): 123-132; The Site of Olynthus, *BSA XXI* (1914-1916): 11-15. (略語 *BSA: Annual of the British School at Athens*)
- 19) Leake, W. M. 1935 *Travels in Northern Greece*, III, London: 260. ウェイスの論文については前註参照。
- 20) 註10参照。
- 21) これら英仏軍内の考古学研究者は、L. レイ (Rey)、E. ガードナー (Gardner)、メンデル (Mendel)、St. キャソン (Casson)、W. A. ヒュートレイ (Heurtley) らである。
- 22) 主要なものに、Rey, L. Observations sur les premiers habitats de la Macédoine, *Bulletin de correspondance hellénique* 41/43 (1917/19) がある (Andronikos 1988: 6)。他の諸報告および文献についてはBorza 1990: 14 脚注30に詳しい。
- 23) Robinson, D. M. 1929-1952 *Excavations at Olynthus I-XIV*. Baltimore-London
- 24) 19世紀半ばに生まれた「メガリ・イデア」の精神はビザンティン文化の復興と深く関連する。註7参照。
- 25) テッサロニキ大学の正式名称は、Αριστοτέλειο Πανεπιστήμιο της Θεσσαλονίκης (Aristotle University of Thessaloniki) である。一方、聖デイミトリウスは、4世紀初頭のキリスト教大迫害時代に殉教した聖人であり、テッサロニキにおけるギリシア正教上の象徴となっている。
- 26) *Από την Πολιτεία και την Κοινωνία της Αρχαίας Θεσσαλονίκης* (Θεσσαλονίκη 1934).
- 27) Ρωμαίος, Γ. 1941 Ανασκαφή στο Καραμπουρνάκι Θεσσαλονίκης. *Επιτύμβιον Ηριστού Τούντα*, 358-87. Αθήνα: Αρχαιολογική Εταιρεία.
- 28) マケドニア墓とは、α. 蒲葦型天井を持つ地下葬室およびβ. 独自の神殿風正面、γ. 埋葬主体部を覆う墳丘、を特色とし (Pantermalis 1984)、紀元前3世紀第3四半期から紀元前2世紀半ばまでマケドニア地方を中心に盛行した (Sismanidis 1985)。
- 29) 方格状都市計画とは別名ヒッポダモス式都市計画 (Ιπποδάμειο σύστημα) とも呼ばれ、縦横に走る直線道路により方形の造成区画が碁盤目状に並ぶ都市計画で、紀元前5世紀に小アジアの

- イオニア系都市において発明されたという。古代マケドニアにおいてこの都市計画を採用したのが、中央マケドニアのペラやヴェリア、ディオーン、テッサロニキであった。広大な平野に広がるペラにおいて最もよく残存している。ペラの都市計画については、Siganiidou 1990に詳しい。
- 30) このA. E. M. Θ.のほか、マケドニアの考古学雑誌は、*Αρχαία Μακεδονία* や *Εγνατία*、*Μακεδονικά*、*Θεσσαλονίκη* などがあり、ギリシアの考古学雑誌(年報)として、A. A. A. (*Αρχαιολογικά Ανάλεκτα εξ Αθηνών*)、A. Δ. (*Αρχαιολογικόν Δελτίον*)、A. E. (*Αρχαιολογική Εφημερίς*)、Π. Α. Ε. (*Πρακτικά της εν Αθήναις Αρχαιολογικής Εταιρείας*) などがある。
- 31) これらの外国発掘調査隊の報告も上述のA. E. M. Θ.やA. Δ.などのギリシアの学術誌に掲載されている。
- 32) Cambitoglou, A. and J. K. Papadopoulos, *Mediterranean Archaeology* 1 (1988): 180-217.ほか。
- 33) Papazoglou, F. 1988 Les villes de Macedoine á l' époque romaine, *Bulletin de correspondance hellénique* Suppl 16.
- 34) Σαμσάρης, Δ. 1973 *Ιστορική Γεωγραφία της Ανατολικής Μακεδονίας κατά την Αρχαιότητα*, Θεσσαλονίκη.
- 35) 前述。
- 36) 翌年同博物館で「アレクサンドロス (Αλέξανδρος: Ιστορία και Θρύλος στην Τέχνη)」展、1983-1983年には米国において「アレクサンダーへの探求 (Search for Alexander)」展が実現した。
- 37) 下記aについては、マケドニア考古学のみならず、ギリシア考古学全体についても適用される。
- 38) しかしながら、一般市民の東洋および日本に対する興味は少なからず存在する。特に歴史と文化への関心は高い。それにも関わらず、正確な情報が与えられていないのが現状である。
- Brocas-Deflassieux, L. 1999 *Beroia, Cite de Macedoine - Etude de Topographie Antique*. Beroia.
- Clogg, R. 1991 *A Concise History of Greece*. Cambridge, Cambridge University Press. (邦版: 高久暁訳 2004『ギリシャの歴史』創土社)
- Daniel, G. and C. Renfrew 1988 *The Idea of Prehistory*. Edinburgh University Press. (邦版: 富井眞訳 2001『先史の観念』真陽社)
- Drougou and Saatsoglou-Paliadeli: Δρούγου, Στ. και Χρ. Σαατσόγλου-Παλιαδέλη 1999 *Βεργίνα - περιδιαβάζοντας τον αρχαιολογικό χώρο*. Αθήνα.
- Kotsakis, K. 1991 The Powerful Past: Theoretical Trends in Greek Archaeology. In I. Hodder (ed.), *Archaeological Theory in Europe: the Last 3 Decades*, 65-90. London, Routledge.
- Kotsakis, K. 1998 The Past is ours. In L. Meskell (ed.), *Archaeology under Fire*, 44-67. London, Routledge.
- Kotsakis, K. 2003 Ideological Aspects of Contemporary Archaeology in Greece. In M. Haagsma, P. D. Boer and E. M. Moorman (eds.), *The Impact of Classical Greece on European and National Identities: Proceedings of an International Colloquium, held at the Netherlands*, 55-70. Amsterdam, J. C. Gieben Publisher.
- Morris, I. 1994 Archaeologies of Greece. In I. Morris (ed.), *Classical Greece: ancient Histories and Modern Archaeologies*, 8-47. Cambridge, Cambridge University Press.
- Pantermalis 1984: Παντερμαλής, Δ. 1984 Οι μακεδονικοί τάφοι της Περίας. Στο *Οι Αρχαιολόγοι Μιλούν για την Περία (28-29 Ιουνίου και 4-5 Αυγούστου 1984)*, 10-15. Θεσσαλονίκη.
- Romioroulou, K.: Ρωμοπούλου, K. 2002 Χρονικό της Αρχαιολογικής Δραστηριότητας στη Βόρεια Ελλάδα (1912-2000), 174-177. Στο Δ. Ν. Γαρουφαλής και Δ. Ε. Κωνσταντινίδη-Συβρίδη (επιμ.), *Η Αρχαιολογία στην Ελλάδα*, 174-177. Αθήνα.
- Shanks, M. 1996 *Classical Archaeology of Greece*. London, Routledge.
- Siganiidou, M.: Σιγανίδου, M. 1990 Πολεοδομικά Θέματα της Αρχαίας Πέλλας, 167-174. Στο *Μνήμη Δ. Λαζαρίδη. Καβάλα 9-11 Μαΐου 1986*, 167-174. Θεσσαλονίκη.
- Sismanidis 1985: Σισμανίδης, K. 1985 Μακεδονικοί τάφοι στην πόλη της Θεσσαλονίκης, *Θεσσαλονίκη* 1: 35-70.

参考文献

Akamatis, I. M.: Ακαμάτης, I. M. 2004 *Πέλλα και η περιοχή της*. Αθήνα.

Andronikos, M.: Ανδρόνικος, M. 1988 Η αρχαιολογική έρευνα στη Μακεδονία. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 1 1987: 1-8.

Borza, E. N. 1999 *Before Alexander: Constructing Early Macedonia*. California.

Borza, E. N. 1990 *In the Shadow of Olympus, The emergence of Macedon*. Princeton.

松尾 登史子

九州大学大学院人文科学府博士課程

Toshiko MATSUO

Department of Archaeology, Graduate School of Humanities,

Kyushu University